

ハリネズミくんの ココロ。



ある日の夕方――。

学校から帰った小学校三年生のけんたは「うわ――ん」と泣きながら、おうちに帰ってきました。

「どうしたんじゃ？」とけんたのおじいちゃんは聞きました。

「またケンタくんに僕のノートに落書きされた！！お気に入りのノートだったのに・・・」



おじいさんはけんたくんの頭をごしごしなでてやり、「それはかなしいなあ。どれそのノートおじいちゃんに貸してみなさい。」といました。

けんたのノートには同じクラスで同じ名前だけど性格は正反対のいじわるケンタくんの字でぐちゃぐちゃにされていました。

「ありゃりゃ、これはすごい・・・」とおじいさんはびっくり。

だけど、ケンタくんにいじわるされたのはこれまでに何回もありました。

そのたびにけんたはわんわん泣きました。だから周りからは「泣き虫けんた」と言われていました。

おじいちゃんはノートに消しゴムをかけました。

ていねいに、ていねいに、ごしごし、ごしごし、

するとどうでしょう。

けんたのノートはあっというまにきれいになっていきました。

けんたは「おじいちゃん、ありがとう！！」

とって喜びました。

おじいちゃんはにっこり笑って、

「また何かあったらいいなさい。直せることだったらおじいちゃ

んが直してあげるから」

とけんたの頭をなでてやりました。

そんな優しいおじいちゃんがけんたは大好きなのです。



だけど、そんなある日、またけんたは泣いて帰ってきました。

だけどいつもの泣き方と少し違いました。

けんたはしゃっくりをあげながら

顔は真っ赤になってまるでカミナリがおちたように、ぎんぎん泣いています。

なにごとかと思い、おじいちゃんは「どうしたのか？」と聞いてみました。

けんたはどろどろによごれたすこしやぶれた布のバッグを見せました。

「マっママが作ってくれた僕のバッグ、ケンタくんが・・・ケンタくんが・・・」

おじいちゃんはかわいそうに思い、けんたをぎゅうっと抱きしめてやりました。

おじいちゃんのなつかしいような匂いとあたたかさにけんたは少しずつ落ち着いてきました。

そしてけんたはおじいちゃんのひざのうえに座り、背中をなでてもらっています。

「ケンタくんはどうしてぼくにたくさんいじわるするんだろう」

とおじいちゃんに聞きました。



おじいちゃんは「どうしてなんだろうねえ、ケンタくんはどんな子なんだい？」

けんたは「いつもえばってるよ。人の給食かってにたべたり、ガラスわって先生にしかられたりしているよ。」

「そうかい、もしかしたら、ケンタくんはさみしい子なのかもしれないね」

けんたは顔を真っ赤にさせて、「おまけに今日はバッグまでぼろぼろにされちゃった。

もうケンタくんのことゆるせないよ」

と手をぎゅうっとにぎりしめました。

おじいちゃんはおやおやと目を丸くさせました。

そして、「けんたはやさしい子だからなあ」

と笑いました。

「ぼくやさしいかな？ 弱虫ってよくいわれるけど」

「本当の優しさは心のつよい人が持っているんだよ」

「どういう意味？」

「本当につよい人は人をいじめたりなんかしないんだ。

それよりも困っている人がいたら助けてあげられる人のことをつよいっていうんだよ。

心が弱いと人のことを助けるよゆうもないからね。

人のことを思いやれる心を本当に強いっていうんだよ」

けんたは「でも、ケンタくんいつも人をいじめているよ。そしたら心がよわいのかな？」

「そうかもしれないね。弱いから人をこうげきして自分を守っているのかもしれないよ。

ハリネズミみたいなものさ。怖いからはりをだす。

「だけどそんなハリネズミくんをこうげきされたからといってこっちもこうげきしたらかわいそうだろう。

それがいずれ、どこかの国のように、たくさんの人が悲しむこともあるんだから」



けんたは「わかったよ」とうなづきました。

おじいちゃんは「えらい、えらい、優しい子だなあけんたは、つよい子だ」

とってけんたを大きな手の平でなでてやりました。

おじいちゃんは「それにケンタくんにとっていいとろこが一つくらいあるんじゃないのかい？」

けんたは「え————っあるかなあ。いやなことしかされてないからな」

おじいちゃんは「その子のなかにある小さな光を見つけたら何か変わるかもな」

けんたはおじいちゃんの言っている意味がよくわかりませんでした。

そんなある日のことでした。

けんたはお母さんのお使いの帰り道でケンタくんを見つけました。

(げっケンタだ！)

だけどケンタくんはこちらには気づかずに一人ぼっちでブランコをきいきいとゆらしていました。

夕日のせいかなんだかさみしそうに見えました。

(なにかあったのかなあ・・・) と思いましたが、

(あっ早く帰らないとママが待ってる) といそいでおうちにかえりました。

家につくとおじいちゃんにそのことを話しました。

「そうかい・・・」とおじいちゃんは目をとおくにやりました。

けんたは「あれからずーっと考えていたんだけど、ケンタくんのいいところあったよ。ずーっと前に

おとうとの遊び相手していたよ。」

おじいちゃんはしわくちゃんな顔でにっこり笑って

「ケンタくんの光に気づいてあげれたんだね。えらいえらい、優しい子だけんたは」

といってけんたの頭をなでてやりました。

おじいちゃんの手の手は平はぶあつくてあたたかくてけんたは大好きでした。

その夜、

おじいちゃんいっしょのふとんでぐっすりとねむりました。

よくる朝、

学校の朝の会で先生が黒板の前に来ていました。

ケンタくんはその日はお休みしていました。

「えー。ケンタくんがこのたび転校することが決まりました。

そこでクラスで折り紙のプレゼントをしたいのですが、誰かつくってくれる人」

だけど、教室はしーんと静まりかえっています。

けんたはさみしい姿のケンタくんのことを思い出して、「はい」と手をあげていました。

周りのクラスの子からケンタくんは親のリコンが決まり、お父さ

んについていくことにしたのだとききました。

ケンタくんはさみしかったのかもな、とぽつりとおもいました。

けんたはもう一人のケンタくんのためにチューリップの折り紙を
プレゼンすることにしました。

家に帰り、おじいちゃんにも手伝ってもらうことにしました。

赤、青、黄、ピンクの色のチューリップをおじいちゃんと一緒に
ていねいに折っていきました

そして

転校する当日――。

「クラスみんなからケンタくんにはプレゼントです」といって

けんたは黒板の前でしかめっつらのケンタくんには折り紙のプレゼ
ントを渡しました。

ケンタくんのしかめっつらが泣き顔になってぼろぼろと涙を流し
て泣きました。

「たくさんいじわるしてごめんな」

ケンタ

といっ
てまた
ぼろぼ
ろと泣
きま
した。

けんた
も涙が
でそう
になり
ました
。

おうち
に帰り
、

おじ
いちゃ
んにそ

のことを言いました。



「ケンタくんも自分に自信がなかったのかもなあ。

けんたをいじめることで自分は強いんだっていいかったのか

もね。

ひとは同じことをされて人の心の痛みがわかることもあるけれど

その逆もあるんだなあ。

けんたの優しさにケンタくんの心のはりがぬけていったんだね」

おじいちゃん言葉はむずかしくてよくわからないこともあるけど、

なんだか心が軽くあったかくなってけんたは

今日ほどうれしいことはないな、と思いました。

おわり。

泣き虫けんたくん。

<http://p.booklog.jp/book/105285>

著者：☆aoi☆

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kumonosu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105285>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105285>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ